

神の国への招待

(ルカによる福音書14:15~24、イザヤ書42:5~7)

今朝は、ルカによる福音書14章15節から24節までの、私たちが現在礼拝で用いている新共同訳聖書では、『大宴会』のたとえ」と言う小見出しがついた個所が、説教のテキストになります。前回から続く食事会でのことでした。主イエスが、招いてくれた家の主人に、お返しを求めないで貧しい人、体の不自由な人、足の不自由な人、目の見えない人を食事会に招く者の幸について、「(その人は) 幸いだ。正しい者たちが復活するとき、あなたは報われる」、と言われました。今日の箇所は、その言葉を聞いていた客の一人が、思わず叫んだ、「神の国で食事をする人は、なんと幸いなことでしょう」と言う、感嘆の言葉から始まります。恐らく、この客は、「正しい者たちの復活」と言う言葉を聞いて、咄嗟に、完成された神の国を想像し、そこで繰り広げられるであろう大宴会に思いを馳せ、それに与れる者の幸いを、うっとりと思ひ浮かべ、思わず、こう叫んだのでしょう。以前にも、こんなことがありました。ルカによる福音書11章27節に出て来た話です。主イエスの話される言葉に感動した或る女が、突然、群衆の中から、声高らかにこう叫びました。「なんと幸いなことでしょう、あなたを宿した胎、あなたが吸った乳房は」と。しかし、これに対して、主イエスは、こう返されました。「むしろ、幸いなのは神の言葉を聞き、それを守る人である」と。聞いて、或いは、眺めて、ただ「いいなあ」と、感心したり、憧れたりするのではなく、信仰に於いて、一番大切なことは、神の言葉を聞いて、それを守ること、これ以外にない、と、主イエスは、そう言われたのです。今日の箇所に於いても、ほぼ同様なことが語られます、但し、譬え話をもって語られますから、受ける感じは、全く別物に思われます。学びへの前備えは、ここまでにして、早速、今日の本題、譬えそのものの学びに入りたいと思います。

譬えは、こう始まります。「ある人が盛大な宴会を催そうとして、大勢の人を招き、宴会の時刻になったので、僕を送り、招いておいた人々に、『もう用意ができましたから、お出てください』と言わせた」と。既に、前もって招待状は出されていたのです。いよいよその時になって、主人は、更に、念には念を入れ、わざわざ、僕まで送り、「万端用意は整いました。どうかお出ましく下さい」と、言わせるのです。世の中に、こんな丁寧な主人がいるものか、と、主イエスの譬え話の信憑性を、つい疑いたくもなるのですが、主人は、飽く迄も、鄭重なのです。ところが、招かれた方は、さぞや感謝、感激するか、大いに恐縮することだろうと思いきや、何と、彼らは皆、揃いも揃って、辞退し始めたと言うのです。最初の者は、「畑を買ったので、見に行かねばなりません」と言って、断りました。次の者は、「牛を二頭ずつ五組買ったので、それを調べに行くところです」と、理由を述べ、辞退しました。最後の者は、「妻を迎えたばかりなので、行くことはできません」と、まるで辞退するのは当然とばかり、断りました。一応、辞退の理由は、皆それぞれに、尤もです。畑を買うと口約束はしても、現地を訪ね、実際に自分の目で確かめなくては、荒地かも知れないのですから、迂闊に売買契約は結べません。牛二頭ずつ五組の買い物と言うのも、高価な買い物です。見た目は立派そうに見えていても、実際には使いものにならない牛だっているのです。果たして、本当に買うに値する代物か、確かめるまでは、容易に手は出せません。使い物にならない、とんでもない代物を掴まされて、それが後で分かって、すべては後の祭りで、泣き寝入りする外ないからです。妻を娶った、ということに関

しては、申命記 24 章 5 節に、「人が新妻をめとったならば、兵役に服さず、いかなる公務も課せられず、一年間は自分の家のためにすべてを免除される。彼は、めとった妻を喜ばせねばならない」と、記されていて、モーセの律法で、こう定められているのですから、彼が、何ら悪びれずに、断るのも、当然と言えば、当然のことなのです。でも、もし彼らが、本当に、自分たちを招いてくれた主人のことを大切に思い、その好意に心から感謝していたならば、果たして、こうも事もなげに断ったか、と考えると、多分そうはならなかったのではないのでしょうか。やっぱり、彼らにとって、主人の招待より、この世の利益や喜びの方がずっと大きく、高い価値があったのです。少なくとも彼らは、自分たちは、本来、招待を受けるに値しない者、とは考えていなかったのは確かです。もし、招待されるに値しない者との自覚があったならば、折角の招待を、こんなにも粗略に扱うことはできなかったはず。基本的に、彼らの心は奢っていたのです。主人の好意ある招待を、何かかにか、尤もらしい理由はつけながら、実際のところは、そんなものは大したことではない、と、見下し、見くびっていたからこそ、慇懃を装いながら、平気で断り、僕をぞんざいに扱うことができたのです。

主イエスは、これをもって何を言おうとされたのでしょうか。大宴会を開き、多くの者をこれに招く主人は、父なる神を暗示し、主人から送られ、「万端整いました。お越してください」と伝える僕は、すべて僕は単数で出て来るので、イエス・キリストを暗示し、招かれていながらあれこれ理由をつけて断るのは、神の民を自負する当時のユダヤ人、中でも、彼らの指導的立場にあった祭司長や律法学者、長老やファリサイ派の人々を暗示している、と見て、間違いはありません。尤も、これは譬え話（パラブル）であって、寓話（アレゴリー）ではありません。譬え話と言うものは、そこで語られるすべてのことに、意味があるわけではなく、全体をもって、ただ一つの真理を示しさえすれば、それで十分役割を果たしたことになるのです。だから、この場合も、最初神は、この世的に評価されている者、価値あるとされている者、つまり、有力者を、神の国に招こうとされたのだが、それに失敗したので、止むを得ず、そうでない者たちを招かれることになったのだ、と理解するとすれば、完全に主イエスの真意を読み誤ってしまうことになるのです。確かに、譬えを、その通りに受取れば、そうとしか読めません。そして事実、歴史は、その順序で進んで行きました。でも、旧約の初めから、貧しい人々は神の顧みの中にありましたし（アモス書 2：6 参照）、異邦人の救いも、当初から神の御計画の中に入っていました（イザヤ書 42：4、6、同 49：6）。でも、あまり先を急がずに、今暫く、譬え話の筋を辿って、学びを進めて行くことにいたしましょう。

21 節以下を読みます。「僕は帰って、このことを主人に報告した。すると、家の主人は怒って、僕に言った。『急いで町の広場や路地へ出て行き、貧しい人、体の不自由な人、目の見えない人、足の不自由な人をここに連れて来なさい』」。町の広場とか路地と言うのは、社会から締め出された彼らのたまり場であり、また、物乞いをするための仕事場だったのです。事実、主イエスは、当時の有力なユダヤ人、祭司長、律法学者、長老、ファリサイ派の者たちからは、概ね、受け入れられませんでした。だが、しかし、「貧しい人、体の不自由な人、目の見えない人、足の不自由な人」たちには、歓迎されもし、実際、彼らの中の多くの者たちは、主イエスにその病を癒され、人生を変えられて行きました。マルコによる福音書 1 章 15 節によると、公生涯に入られた主イエスの第一声は、「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」（マルコ 1：15）であったと言います。以後、主イエスの宣教の言葉は、煎じ詰めれば、この一語に尽きる、と言ってよいのですが、この主イエスによる神の国への招きに応えたのは、実に、彼ら貧しき者たちだったのです。

まさか自分たちのような者が神の国に入れるとは、主イエスに出会うまでは、露だに、考えもしなかった彼らでした。でも、それが叶ったのですから、彼らの喜びは一人（ひとしお）でした。これに反して、神の国の国民には、自分たちこそが相応しい、と、自負していた者たち、彼（か）のユダヤ社会の有力者たちは、主イエスによる神の国への招きを、徹底的に侮り、入ることを拒絶したばかりか、うるさい、目障りだ、と言わぬばかりに、最後は、主イエスを捕え、十字架に磔にして、殺してしまったのです。こうして彼らは、非礼を通り越して、取り返しのつかない大罪を犯してしまうのです。でも、これこそが、紛れもない歴史的事実なのです。

次、22節、23節を読んでみましょう。「やがて、僕が、『御主人様、仰せのとおりにいたしました、まだ席があります』と言うと、主人は言った。『通りや小道に出て行き、無理にでも人々を連れて来て、この家をいっぱいにしてくれ』。通りとか小道と言うのは、町の外側を意味し、異邦人世界を暗示していると、見て、間違いありません。ルカが、ルカによる福音書に続く第二巻として著した使徒言行録によると、福音は最初ユダヤ人に伝えられました。外地にあっても、そこでの伝道は、ユダヤ教の会堂、シナゴグに集うディアスポラ（離散）のユダヤ人を対象としたもので、暫くは、その状態が続くのです。本当の意味で、異邦人伝道が始まったのは、ユダヤ人たちが、バルナバやパウロが宣べ伝える福音に耳を閉ざし、迫害さえ始めたからで、止む無く彼らは、伝道の対象を、異邦人とせざるを得なくなり、以後専ら彼らは、それに専念することになるのです。そのきっかけとなった事件は、小アジアにあるピシディア州のアンティオキアで起こりました。この時パウロとバルナバが語った言葉が、使徒言行録13章46節に記されています。それはこうでした。「神の言葉は、まずあなたがたに語られるはずでした。だがあなたがたはそれを拒み、自分自身を永遠の命を得るに値しない者にしている。見なさい、わたしたちは異邦人の方に行く」。以後専ら使徒言行録は、パウロによる異邦人伝道について語るのですが、彼を中心としたその協力者たちの働きによって、福音は小アジアからギリシャにもたらされ、遂には、当時の世界の中心とされたローマにまで届けられることになるのです。それで終わるかと思いきや、使徒言行録は、結びの言葉を置かず、中途半端な形で、終わっており、言わず語らずに、今も異邦人伝道は続けられ、これ以後もずっと、恐らくは、世の終わりまで続けられるであろうことを暗示しているのです。譬え話の中で、僕が言った「まだ席があります」とか、主人が言ったと言う「この家をいっぱいにしてくれ」と言う言葉は、そのことを暗に語っているのだ、と、そう理解されるのです。

或る人が言いました。「自然と恩寵は真空を嫌う」と。自然が真空を嫌うのはよく分かります。どんなに真空状態を作り出そうとしても、何時の間にか、その状態は元の木阿弥、どこからともなく空気は入って来て、その空間を、空気で充満させてしまいます。恩寵の世界、つまり、神の恵みの御業、ここでは、“神の国”と言うことになるのですが、そこは、大広間に少数者が集められ、隙間風が嫌に気になるような、如何にも寂しげな世界ではなく、反対に、そこが、人でいっぱいになることを、この家の主（あるじ）でいます、主イエス・キリストの父なる神は、心底願われるのです。だから、こうも言われます。「無理にでも人々を連れて来て」と。勿論それは、力づくで、暴力をも辞さず、何が何でも、無理やりに、と言うことではありません。そんなことをしても、面従腹背が起こるだけで、主催者にとっても、集められる者たちにとっても、何の喜びにもなりません。自由と喜びのない所を、“神の国”など呼ぶわけには行きません。では、「無理にでも」とは、何を言うのでしょうか。神の側の熱心、これに仕える者たちの熱心、これを指すのです。それは愛に基づく熱心、とそう言ってもよいかも知れません。

最後24節が残りました。そこでは、こう述べられます。「言うておくが、あの招かれた人たちの中で、わたしの食事を味わう者は一人もいない」と。何時の間にか、譬え話は、主イエス御自身の言葉に変わり、神の国の食事は、「わたしの食事」に、と言うことは、つまり、「主イエス・キリストの食事」に変わっています。ここで、父なる神と主イエス・キリストとは、一体であることが明確にされます。従って、主イエス・キリストに対してしたことは、即ち、父なる神に対してしたことと同じで、その罪が裁かれずして放置されるわけがありません。勿論、悔い改めの機会は残されています。でも、その機会さえも侮り、無視しながら、それでも何事もなかったように、もし、神の国に迎えられるとすれば、そんな善も悪も、一切何も問われず、何をしようと皆同じ、と言うような世界を、一体神の国などと呼べるでしょうか。そんな世界に、何の魅力、何の希望があると言えるでしょうか。それならば、この世の国の方が遥かにもっと上等、と言うことになります。この世では隠されていた善が明らかにされ、この世では悪知恵や誤魔化しによって巧みに隠されていた悪が露わにされ、神の公平な裁きによって、一方は称賛され、一方は裁かれる、と、信じられる故にこそ、神の国は頼もしく、魅力ある、信頼するに足る所となるのではないのでしょうか。コリントの信徒への手紙一14章33節で、「神は無秩序な神ではなく」と言われているように、幾ら、赦しだ、愛だと言っても、善悪の区別もつかない、何が善であって何が悪か、判定さえされない、従って賞罰もない、そんな世界に、一体誰が堪えられるでしょうか。最後の審判があると信じ、更に、その向こうに神の国が備えられていると確信すればこそ、問題だらけのこの地上の人生を、それでも尚、諦めず、投げ出さず、生き通すことができるのではないのでしょうか。

讚美歌の262番は、1節で、「十字架のもとぞいとやすけき、神の義と愛のあえるところ、あらしふくときのいわおのかげ、荒野のなかなるわが隠れ家」と歌われます。十字架は神の義と愛のあえるところ、だから尊く、権威があり、信頼に足るのです。ここで示された神の義と愛が実現したものこそ、完成された神の国なのです。これへの招きは、すべての人に向けられているのです。喜んで、これに応じたいものだと思います。

(三輪恭嗣)